

大空 (生徒・保護者向け) 23号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和2年10月30日(金)

「元服」という節目

□本日の概要

- 人は「灯台下暗し」に陥りやすい。身近なアドバイザーを大切にしてほしい。
- 分かったつもりになると人は考えなくなる。批判的な視点で、分かっていると思い込んでいるものを問い直して欲しい。
- 日々の節目、人生の節目を意識し、節目ごとに次のステージの意味を考えて欲しい。

□「灯台下暗し」からの脱却

これから冬にかけて、進路について考える機会が多くなります。これから様々な選択をする際、心がけて欲しいことを3つお話します。

「灯台下暗し」という諺を知っていますか。灯台とは、岬にある燈台ではなく、電灯が無かった時代に使われていたロウソクの台、つまり燭台のことです。燭台の明かりは、高い位置から微かな光で照らすものですので、電灯と違って台の下の部分は暗くなってしまいます。このことから、人は自分の身近なものは見えなくなりがちだとか、答えや大切なことは意外と身近にあることを指摘する際に使われています。また、これは諺ではありませんが、メーテルリンク(1862~1949 ベルギーの作家)の童話「青い鳥」も、本当の幸せは身近な所にあったと解釈できますので、身近な所は見えなくなりがちだという心理は、洋の東西を問わず、普遍的なものかもしれません。

皆さんにとって最も身近なものは、保護者で

あり、兄姉や先生や友だち、先輩などです。特に、保護者は皆さんに最も近い存在であるため、逆に進路のことなどは、三者面談など特別な機会でないと話さないものです。兄姉、先輩、友だちにしても同様です。改めて、身近な人に質問してみると、様々なヒントが見つかります。身近なアドバイザーを大切にしてください。

□問いを立てる~分かったつもりからの脱却~

次に、十分、分かっていると思っているものを、改めて問い直してみてください。

もうすでに何回か話しましたが、人間心理の特徴として、人は「分かった」と思うと、もうそれ以上知りたいと思わなくなるという性質があります。人は「分かる」というゴールを目指して考えます。皆さんが一生懸命考えるのは、「分からない」からです。でも、考えてみれば、人間の周囲は分からないことばかり。すべてを考え続けるには限界があります。そこで、多くの人は身の回りのことを「一応分かった」ということにして、日常生活ではスルーする傾向があります。確かに、自分の周りのもの全てに疑問を持ち続けると精神を病む懸念がありますので、この仕組みは悩みに囚われることを避けるための合理的な仕組みです。しかし、一度「一応分かった」に分類されてしまうと、人は改めて分かるうとしなくなる危険があることも知っておいてください。だから、優れた研究者などは、簡単に「分かった」と納得せず、分かりきって

いるような物事を自分なりに見つめ直し、他の人が見落としていた新たな発見をするのでしよう。「一応分かった」に分類していたことを、「本当にそうなのか」と改めて考え、自分なりに問いを立てることを「批判的思考」といいますが、皆さんにはこの思考を身につけて欲しいと思います。

皆さんは、進学したいと思っている学校や、自分が学びたいと思っていることを本当に分かっているでしょうか。進学の延長にある学びや、さらにその先にある職業のことなど、考えているいるでしょうか。分かっていると思っていたことが、意外と分かったつもりであることが多いのです。もちろん、現段階で全部分かる必要はありませんし、それは不可能ですが、自分が分かったつもりになって、思考停止になっていないか、自問自答してみてください。大切なのは、問いを立て続けることです。

□節目の意義

最後に、日々の節目を意識し、節目ごとに次のステージの意味を考えて欲しいと思います。

人は考えを深める時には、多くの人はずっと立ち止まります。私たちを取り巻く時間は、水のように切れ目がないもので、平穏な時は、単調に感じる流れです。私たちは、この日常という時間の流れの中で少しずつ成長しているのですが、単調であるが故、その意義を忘れがちで、そのため日常は緊張感がなくなったり、メリハリがなくなったりしがちです。そのため、人は、人生や日々の様々な行事や節目をつくり、日常の目標にしたり、人生の次の段階を考える機会にしてきました。

節目とは、人が、次のステップを上る意義を考えさせるために創り出したもので、文化の一種です。代表的なものは、誕生日や記念日のような私的なものから、七五三や、成人式、結婚

式や葬式などの人生における通過儀礼などがありますが、特に成人の儀式は、奈良時代ぐらいからすでに存在しているようで、男子は元服、女子は裳着と言われました。成人の年齢には幅があり、それぞれの時代や男女で違いますが、概ね10代の頃に行われていたようです。(古典の竹取物語や、源氏物語などに様々な成人式の描写が出てきます。)

中高生の皆さんは、実はこの元服の時期にあたります。元服というと大げさに聞こえるかもしれませんが、日常に節目をつくり、自分がやろうとしていることの意義を考えることは大切です。だから、学校では入学式があり、学期ごとに始業や終業の式があり、卒業式があります。行事でも、開会式や閉会式があり、一日の中でも朝のSHRがあり、帰りに終礼があります。一日の中のちょっとしたスタートでも、今日という一日をどう過ごすか考えるだけでも一日の豊かさが違ってきます。人生の節目では、自分の来し方を振り返り、これからどう生きるのか考えます。節目をつくり、節目ごとに、その意義を考えるということは大きな意味があるのです。

この秋は、高校3年生なら大学等への進学、高校1・2年生は教育課程の選択、中学3年生なら高校への進学など、さまざまなことを選択する節目の時期です。

本校は、大学進学を志している人が殆どですが、低学年になればなるほど、自分の学びたいこと、将来やりたいことについては漠然としているものです。この秋に、自分は何を学びたいのか、何のために大学に行くのか、何のために高校に行くのか、改めて問い直して欲しいと思います。そして、その目的達成のために、日常の学習の意義を改めて問い直し、日常の意義を再確認して欲しいと思います。